




琉球大学学術リポジトリ

移植前のリツキシマブ投与および脾臓摘出術は、どちらも腎移植術後の新規HLA抗体産生に影響を与えない

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学 公開日: 2015-06-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安次嶺, 聡, Ashimine, Satoshi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/31196

(別紙様式第 7 号)

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

報告番号	課程博 * 第 号 論文博	氏名	安次嶺 聡
論文審査委員	審査日	平成 27 年 3 月 13 日	
	主査教授	岸本 菜博	
	副査教授	植田 真一郎	
	副査教授	青木 一雄	
(論文題目)			
Neither pre-transplant rituximab nor splenectomy affects de novo HLA antibody production after renal transplantation (移植前のリツキシマブ投与および脾臓摘出術は、どちらも腎移植術後の新規 HLA 抗体産生に影響を与えない)			
(論文審査結果の要旨)			
1. 研究の背景と目的			
<p>免疫抑制療法の進歩により T 細胞が関与する細胞性拒絶反応がほぼ制圧されたことで、腎移植の成績は著しく向上した。かつてはハイリスクと考えられていた ABO 血液型不適合症例や抗 HLA 抗体陽性症例でも、短期成績では高い移植腎生着率が得られるようになった。一方、ドナー特異的抗 HLA 抗体が引き起こす抗体関連型拒絶反応が問題となっており、B 細胞の制御（液性免疫による拒絶の克服）が課題である。腎移植術後に出現する新規抗 HLA 抗体は、慢性抗体関連型拒絶反応の発生と関連し、移植腎機能廃絶の原因になるため、その病態の解明、予防・治療法の確立が求められている。本研究の目的は、腎移植前に関してその意義がすでに確認されている脱感作療法が、腎移植後の長期間の新規抗 HLA 抗体産生や慢性抗体関連型拒絶反応の抑制に寄与するかどうかを明らかにすることである。</p>			
2. 研究内容			
<p>本研究（後ろ向きコホート研究）では、ABO 血液型不一致・適合腎移植群 228 例を対照として、ABO 血液型不適合腎移植群 92 例の術後 5 年間の移植腎生着率と新規抗 HLA 抗体出現率について調べた。その結果、移植腎生着率は、ABO 血液型不適合移植群と比較して ABO 血液型不一致・適合移植群の方が著明に高かった。一方、新規抗 HLA 抗体出現率は、群間に差を認めなかった。本研究期間中に腎移植後新規抗 HLA 抗体を認めた 39 症例（ABO 血液型不適合移植群 30 例、ABO 血液型不一致・適合移植群 9 例）のうち、多くの腎機能は良好で、慢性抗体関連型拒絶反応に至ったのは 4 例（各群 2 例ずつ）のみであった。</p>			
3. 研究の成果の意義と学術的水準			
<p>本研究の新規性は、「腎移植前の脱感作療法（脾臓摘出またはリツキシマブ投与）は、どちらも術後短期間の新規抗 HLA 抗体の出現に影響を及ぼしていない、すなわち慢性抗体関連型拒絶反応に対する予防効果を示していない」ことが示された点である。さらなる病態の解明には、より多くの症例の蓄積・長期間の注意深い経過観察を要する。以上、本論文は、腎移植前脱感作療法の意義に関して、一石を投じる臨床研究であり、学位論文に十分値するものであると判断した。</p>			

- 備 考 1 用紙の規格は、A 4 とし縦にして左横書きとすること。
 2 要旨は 800 字～1200 字以内にまとめること。
 3 *印は記入しないこと。